

経営談話室

Vol.100

スクラップ業から3代で環境関連企業へ。
倒産の危機を乗り越え、今や廃電線処理においては
「千葉の三立」として全国にその名をとどかせるまで
に成長を遂げた三立機械工業。

創業者の祖父、会社の基盤をつくった父の志を受け
継ぎ、会社再建から成長に至る新たな歴史を築いた
中根昭会長に創業の経緯から経営哲学、さらには脚
光を浴びる廃電線のリサイクル事業についてお話をう
かがいます。

市場が求めるものを適切に把握し 製品の精度に徹底的にこだわる

三立機械工業(株) 取締役会長

中根 昭

なかね・あきら

1945(昭和20)年生まれ(66歳)。千葉市出身、同市稲毛
区在住。県立京葉工業高校卒。1963(昭和38)株式会
社三立製作所入社。1973(昭和48)年同社専務取締役就
任。1977(昭和51)年12月三立製作所解散。1978(昭和
52)年4月三立機械工業(株)設立に伴い代表取締役 就任。
2010年7月同社取締役会長就任。日本資源機械工業共同
組合副理事長、千葉北安全運転協議会副会長を務める。

所在地:千葉市稲毛区山王町335

事業内容:廃電線処理機、各種リサイクル処理機の製造販売

受賞歴:千葉県ベンチャー経営者表彰「優秀社長賞」
(2010年2月)



お得意さんを回り、一生懸命 剥線機のメリットを説明して回りました

弊社は、私の祖父が昭和30年ごろに千葉市内で興したスクラップ業が前身です。その後、家業を継いだ父がスクラップの中の電線屑の処理として、電線を焼却して中の銅を取り出し資源の回収を図っておりましたが、燃やす時に発生する煙やにおいがひどく近所から苦情が寄せられ苦慮していました。

そのころ、たまたま鉄工所を営む機会が出来たのを機に、電線屑を燃やさずに被覆を剥離する「剥線機」の開発に取り組み、昭和36年に特許を申請し昭和38年に特許を取得しました。

しかし、当時は環境に対する意識は低く、また品位の良いリサイクルなどは見向きもされず、電線屑を焼却(野

焼き)することが一般的で「剥線機」はなかなか浸透しませんでした。

そのころから私も事業に参加し、やがて少しずつですが、関心を示すユーザー様が現れ、公害が社会問題となって「剥線機」がようやく評価されるようになって来ましたが、昭和50年代に入ったころ、下請け加工の仕事(当時、90%が下請け加工)が激減し当社は倒産に追い込まれました。

倒産危機から リサイクルでトップ企業へ

幸い、再建に協力的な仕入れ業者さんの協力により、「剥線機」は銅資源の循環型リサイクルに貢献でき、一方、環境問題の解決にもなると確信をし、「剥線機」を事業の柱に事業を展開をしようと昭和52年4月に当社を立ち上げました。当時は機械2~3台を作っては2トトラックに積み、1台をユーザー様に納品し、残りを近隣のスクラップ会社に売り込み、「売れるまでは帰らない」との決意で飛び回ったことを思い出します。

剥線機は当社を代表する製品になりましたが、今日に到るまでにはいろいろなことを勉強しました。当時、まだまだ完成度が低く、刃物の損傷が早かったり、銅と被覆の分離が不完全であったりとか、ユーザー様から苦情があるたび、全国に飛びまわりユーザー様の



お叱りを受け、改善し、やっと完成度の高い製品にたどり着きました。今思うに、まだ不十分な機械の完成度を、ユーザー様の信頼をいただけるようにしたい思いが今日、やっと、ある程度の完成度に高まったと思っています。これもメーカーだけの目線ではなく、ユーザー様の目線を認識した結果と考え、いつもこだわった機械づくりを目指したいと思っています。

事業はさらに、電線を切断する切断機(アリゲーターシャーリング)や、コンピュータに使われるコードや制御電線、自動車のワイヤーハーネス(ビニールテープで束状にまとめられた電線)に対応する機械など、お客様の要望に合わせて製品の種類を広げました。一方、「テクノフェア」や「廃棄物展」(現、ニュー環境展)といった国内最大級の展示会に出品を続けたことで全国各地から評価され、受注も順調に拡大をし、廃電線の処理機メーカーをして「廃電線のことなら千葉の三立へ」と言われるようになりました。廃電線などのリサイクル市場では60%以上のシェアをいただいています。

中根さん「Q&A」

Q1 1日の平均的なスケジュールは?

1日の始まりは始業(8時)の5分~10分前に行う朝礼から。お客様のニーズに応え、質にこだわりの製品を提供するという私の物づくりの基本的考え、姿勢を事例を挙げながら社員に伝える。今の私の会社での一番重要な仕事です。

Q2 よく読む新聞&雑誌は?

日本経済新聞、日刊工業新聞、業界誌2誌。

Q3 仕事以外でハマっていることは?

ゴルフ。会長になってから時間にゆとりができ、月に4~5回まわれるようになりました。

Q4 座右の銘(好きな言葉)は?

ものづくりに対する誇りとお客さまに対する誠意。

Q5 とっておきのストレス解消法は?

お酒。元気をつけるためと気分転換のため。

Q6 「やる気の源」をひと言でいうと?

とにかく、お客さまに喜んでもらえること。銅資源のリサイクルで国内トップになるという目標。



信頼を得る製品を提供することで お客さまがお客さまを連れてきてくれる



総合処理機メーカーとしての さらなる挑戦

当社が今、特に注力を注いでいるのが自動車のワイヤーハーネスの処理機です。ワイヤーハーネスの処理は、裁断粉碎して重い銅と軽い樹脂を比重で分離して分けるのですが、ワイヤーハーネスは細い電線をビニールテープで束ねているため、テープの接着剤が粉碎したものに混入するので銅と樹脂の分別を難しくしてしまいます。

また、コネクタ（接続部品）も一緒に処理をしますが、コネクタは真鍮なので、電線の仕上がり銅に少しの真鍮が混入してしまい銅の品位が下がります。このため、自動車用ワイヤーハーネスは国内の処理をせず、多くが中国にそのまま売却されてきました。

私は常々、銅資源が無い日本が中国に資源を輸出してしまうのかと、危惧しており、なんとか日本でも採算の取れるシステムを作りたいとの思いで、自動車用ワイヤーハーネスの処理ができる湿式ナゲットプラントを完成させました。

3月の東日本大震災では多くの方々被災されお見舞いを申し上げますが、まだまだ多くのガレキや廃棄物の

処理が遅れているようです。今後、廃棄物の処理や廃自動車の処理が早急に行われるようですが、その中の廃電線の処理に弊社の機器の問い合わせが増えてきており対応中です。なにより、大震災に伴う原発事故の影響がここにも現れております。

これまで、ワイヤーハーネスを含む雑電線を受け入れてきた中国が放射能汚染を理由に、受け入れを拒否し始めました。このため東北各地からの発生分だけではなく日本からの雑電線が行き場を失っています。

今こそ雑電線などを国内でリサイクルする機会と捕らえ、ユーザー様へ説明し国内循環をさらに提唱していきたいと思っています。弊社も東北地方の問い合わせには、特別に通常より割引を多くした販売を心がけています。

会社の“生きざま”を 次世代にバトンタッチ

今注目されている「レアメタル」も私どもの新分野です。

弊社が関わっているのは、主に、レアメタルが使われる半導体の不良品やロス品の処理ですが、実は、その半導体を粉碎する処理機は当社の隠れたヒット商品でもあるのです。現在半導体はサイズや薄さが年々変わり、従来の機械では処理がしづらくなっていますので、ニーズに合った機械を提供したいと考えてい

ます。

もう一つは、「紙管」（ロール紙の芯）です。紙管は鉄で補強していますが、この鉄を除去したいというお客さまの要望に応え機械を開発したところ大きな反響もあり、当社の新たな柱になる期待があります。

私は、昨年7月に社長を息子の亮一に譲り、会長に就任しました。これからは、若い社長が私とは違う方法で会社を発展させていくことでしょう。一方で、マーケットが求めるものを適切に把握し、製品の精度に徹底的にこだわるという弊社の「生きざま」は、どんなことがあって受け継いでいってほしいと思います。信頼を得る製品を提供することで、お客さまがお客さまを連れてきてくれるのですから。



社長の中根亮一さん